



Murata High School 100th Anniversary

百年通信

No.2 2024, 5, 13 発行

創立100周年記念実行委員会

戦時下 [日中戦争~太平洋戦争(1937(昭和12)~1945(昭和20)] の村田実科高等女学校

戦争遂行のための校内行事

日中戦争が起こると仙台の第二師団が主力として動員される村田町からも応召する兵士が出始める

- 「応召兵歓送」
- 「白鳥神社祭典につき参拝 武運長久祈願」
- 「軍人家族・遺族慰問巡視」
- 「非常避難模擬演習」
- 「勤労報国デーにつき神社仏閣清掃」



左記のような行事が連日行われ生徒の大きな仕事となったさらに「家事实習デーとして」勤労奉仕作業が行われるようになる



「国家総動員法」「国民徴用令」「中等学校令」「学徒勤労令」の公布

「村田実科高等女学校報国団」結団(1942.6)・・・国家の動員計画に応ずる校内体制の確立
 「村田高等女学校」の発足(1943.4) ⇨ 実科高等女学校の名称廃止
 教育課程・・・国民科・理科・家政科・体練科・芸能科・工作・外国語科に改編
 (これまでなかった科目・・・「物象」「生物」「武道」「教練」「修練」が加わる)
 女学校校舎が兵舎として徴用される(1944) ⇨ 職員室を教室として使用するようになる
 「女子挺身隊」結成(1944.3) ⇨ 仙台市原町の陸軍造兵廠・船岡の海軍火薬廠に動員
 「動員学徒」壮行式(白鳥神社) ⇨ 仙台市原町の陸軍造兵廠に動員(2年生49名・専攻科生14名)
 終戦の詔勅(1945.8.15)・・・動員先(動員生徒)と東山開墾地(残留生徒)で「玉音放送」を聞く



戦時下の校史



1937(昭和12)年度

- 9/ 1 出征する応召軍人を歓送(年度内に10回開催)
- 12/ 7 上海戦線の郷土兵へ全校生徒の慰問文発送

1938(昭和13)年度

- 5/ 1 戦没者の遺骨を迎える 5/3の町葬に参列
- 6/20 家事实習デー 集団勤労奉仕運動実施
- 9/12 この日から5日間防空演習

1939(昭和14)年度

- 9/ 1 興亜奉公日 神社参拝・慰問文発送・奉仕作業
- 2/11 「皇紀2600年」紀元節拝賀式挙行

1940(昭和15)年度

- 10/30 「教育勅語」煥発50周年記念式挙行
- 11/10 「紀元2600年」奉祝式・旗行列
- 2/ 4 「大政翼賛会柴田支部」発会式

1941(昭和16)年度

- 6/ 1 「村田実科高等女学校報国団」結団式

1943(昭和18)年度

- 4/ 1 村田高等女学校と校名変更
- 5/ 1 行軍(遠刈田方面)
- 6/22 勤労奉仕 出征軍人遺族・家族への奉仕作業
- 3/ 9 「女子挺身隊」結成 増える
- 11 女子挺身隊員 船岡の海軍火薬廠に動員

1944(昭和19)年度

- 6/27 全職員で校庭に防空壕掘り
- 11/14 動員学徒壮行式
- 3/ 4 学徒慰問隊出発

1945(昭和20)年度

- 6/15 学徒結団式
- 7/10 仙台空襲 動員生徒全員無事
- 8/ 9 空襲警報頻繁しばしば授業停止
- 15 動員先と東山開墾地で「玉音放送」を聞く
- 19 動員解除 生徒は村田に午後5時帰着





「ぜいたくは(素)敵だ！」



村田高等女学校時代の思い出

1944年(昭和19)入学生 談 

昭和19年4月、夢と希望に満ち入学した女学校でしたが、毎日が防火訓練、開墾作業、一年のうち冬季を除いてほとんどが農作業でした。2年生の先輩が学徒動員に出発する時、私たちは校門前で見送り、先生には留守番も大事な務めだと言われました。毎日、開墾しながら肥料(牛糞)をタンガラに背負い、坂道を上がり道路脇の流れる水を飲みながらの作業は忘れることができません。

農繁期には、出征家族への奉仕作業に行き、草取り、麦刈り、田植えをしました。後日、苗が根付いているのを見て、安心したものでした。

女学校の校舎は兵隊さんたちの宿舎となり、小学校の職員室が私たちの教室となりました。兵隊さんも草鞋を履き、農作業を行っていました。どんなに辛いことがあっても、戦争に勝つためと、皆不平一つ言うことなく、頑張ったものでした。

昭和20年8月15日、東山の開墾地で、玉音放送を聞きましたが、雑音に何が何やら聞き取ることができずにいました。先生から無条件降伏の内容だと聞かされた時には、皆で泣きながら、これからどうなるのだろうかかと心配でした。

翌年の3月に卒業を迎えましたが、修業年限1年延長で、49人のうち私を含め9人が3年に進むことにしました。食糧不足で1・2年の後輩は農作業に駆り出されましたが、私たち9人は、英語・裁縫・スポーツ等をやっと行えるようになりました。原語で野ばら・菩提樹などを皆で歌ったりもしました。

《国民精神総動員スローガン》



学徒動員 生徒の姿

元職員 談 

戦争が続く中で、国内の食糧事情が益々悪化し、国民生活が一大危機となった。学校も教育どころではなく、荒地の開拓に力を入れるよう国から指示があり、ほとんど授業を放棄して、開墾事業を推進することになった。慣れない女の手で、鋤をとって開墾しては、食糧となる作物の植付作業に従事し、肥桶まで担いで黙々として働いてくれた。

1944年に学徒勤労令が布かれ、終戦1年前に我が女学校にも動員令が下り、2年生全員が仙台市原町苦竹の軍需工場に動員された。校長先生が先頭に立ち、全職員も参加して隊列を組んで壮行式に臨み、町長始め有力者各位から激励の言葉を受けた。白鳥神社に戦勝を祈願し、町民の万歳と歓呼の聲に送られて、さながら応召軍人が出征するときのように出発したのであった。冷やかな工場での作業は実に辛かった。作業を終えて、火の気のない寮に疲れた身体を横たえ、故郷の話に花を咲かせては、お互いに励ましあったものである。満足な食事も与えられず、生徒は次第に青ざめてくる者も出てきたので、3・4人づつ交替で、家へ帰って食糧の補給をさせたのであるが、帰るにも汽車の切符がなかなか手に入らないので随分苦勞をしたものだ。仙台空襲、工場への爆撃があった時には、生徒全員の無事を確認し、うれしくて男泣きに泣いた。しかし、次第に生徒の間にも病気になるものも出てくるようになったので、女の先生方も看病で忙しかった。



「キミがくれたもの」について (内田より)

中学3年の夏休み後、下校はいつも同じクラスのS子と二人でだった。家近くの分かれ道まで約2^キ、30分ほどである。一緒に帰るようになったきっかけは「secret base ~ キミがくれたもの ~」の歌詞に近い。どんな話をしていたかは、定かではないが、一つだけ、ウチダが将来の夢や希望を語り、「大丈夫、叶うよ」と言ってくれたことだけは覚えている。ただ、恋愛感情はなかった。なかったというより、S子は学年500人の大規模校で成績トップを独走しており、次元の違う友人といった感覚が正直なところであった。卒業後は、それぞれ男女別学の高校に進学し、会うこともなくなった。高校卒業後にS子が中学時代の同級生と交際していることは、知っていたし、不幸な別れ方をしたのも誰とはなく聞いていた。ウチダは、大学卒業後2年で結婚したが、その披露宴に突如、S子が招待していた友人とともに現れ、祝いの品と「● Good luck」の笑顔 ☺。それきりである。

中3の帰り道、語らいの中、「大丈夫だよ」で得た勇気と希望。振り返れば、ウチダが高校・大学生活を充実させることができたのは、どこかでS子を目撃し、「何とか追いつこう S子に認めてもらいたい」と頑張ったからなのだろう。そう思えば、今の生活も「キミがくれたもの」かもなのかもしれない。後年、S子には恋愛感情があったような話を伝え聞いたが、どうなるものでもなく、「あの日にかえりたい」わけでもない。ついでだが、長女に「S子」と名付けたのは全くの偶然である。 

さて、生徒諸君。能力(学力・体力・精神力等)を高めることなしに高校生活を充実させることはできない。だが、人間は弱いもので、各人が高い意識を持ち、周りの生徒と関係なく能力を高める努力を続けることは難しい。多くの場合、身近な人たちと競い合う中でより高い能力が身についていくのである。だからこそ、一人ひとりが能力を高め合う仲間をつくっていくことが大切なのだ。特に学力は、競い合い、高め合う仲間を少しずつ増やしていくことが、各人の学力を高め、クラス・年次・さらには学校全体の学力を高めることにつながる。

学力は「生きる力」のすべてではないが、大切な核となる力である。その学力を高める努力なしに「生きる力」が高まることはない。

